

研究発表

源氏物語における虚構の方法

Weaving the fictional web in *Genji Monogatari*: a note on methodology

根 来 司*

In an article entitled “Travelers through the Ages: the Japanese as Seen in Their Diaries”, which appeared in the evening *Asahi* of August 1, 1983, Professor Donald Keene discusses the *Murasaki Shikibu nikki* and notes that since readers often approach this work in hopes of learning something of how Murasaki went about writing her masterpiece, *Genji monogatari*, the expectations brought to this diary exceed those entertained vis-a-vis other such works. However, he continues, at no point in the *Diary* is Murasaki’s genius as a writer given full rein. Professor Keene’s remarks set me to thinking about the genre in which the full range of Lady Murasaki’s talent does come into play, namely narrative fiction, specifically *Genji monogatari*. So I should like to look into the ways in which she set about constructing her fictional world in the *Genji*. Rather than pursue questions of the existence or non-existence of a model or models for the world constructed in *Genji*, my study approaches the problem in terms of the operation (*bunshin* 分身) whereby an author endows characters in a piece of fiction with aspects of

* NEGORO, Tsukasa 神戸大学教育学部教授

his/her own life and experience. *Bunshin* is a psychological concept, but one that applies well to literary creation in the author's act of expressing his/her views of experience through the medium of the characters that are, so to speak, "broken off". *Bunshin* is thus the process whereby the writer breathes the very life of humanity into the characters that people a work of fiction, and the primary means by which a successful piece of writing takes on that variety of abstraction and reality peculiar to literature.

A little reflection on the fictional world of the *Genji* suggests that *bunshin* is at work in both the production and development of the characters, and, as an emphasis on the quality of empathy (*nasake*), in the depiction of the beauties of love between the sexes. In this sense, the process of *bunshin* is at the heart of the presentation of the work's major theme, the various kinds and phases of human love.

The relationships between women as well--for example, Murasaki and the Akashi Princess--are depicted in terms of empathy and sympathetic understanding. The eternally appealing beauty of human compassion, of entering into another's feelings, constitutes the tone underlying *Genji monogatari*, and it is realized only by excluding that portion of humanity that does not conform to these canons.

Viewed in this light, one understands why Professor Keene should write (in his third article on the *Diary*: 3 August) that of all the depictions of courtly life to be found in the world's literature, he is moved only by the one presented in the *Genji*.

序

私はこの夏、朝日新聞夕刊に、ドナルド・キーン氏が「百代の過客^{かかく}・日記にみる日本人」という文章を書いておられるのを、楽しく読みました。そのうち紫式部日記について書いた8月1日の夕刊で、キーン氏は紫式部日記をはじめて読む人はこの日記に紫式部がどのようにして、源氏物語という大傑作を生み出したかという謎への手がかりを求めて読むから、ほかのどんな日記に対するよりも大きな期待をもって読む。けれども、紫式部日記には源氏物語作家としての紫式部の本領が遺憾なく発揮されている個所など、どこにも見当たらないと述べておられるのをおもしろく思ったわけです。

さて私は紫式部のような大作家を見ていると、その実生活と彼女の広い意味での精神生活というか思想生活は連続していないように思うのです。大作家というものはもう実生活を卒業していて実生活を乗り越えています。また乗り越えなければ表現というものは成り立たないと考えるのです。そこで私は紫式部日記からしばらく離れまして、紫式部のとった源氏物語における虚構の方法は、どのようなものかを考えてみたいと思います。といっても、よく源氏学者が問題にされるように、源氏物語にモデルがあったかなかったかを問うわけではありません。紫式部自身の源氏物語の方法を問題にするのに、モデルがあったかなかったかを云々するのではなく、作者のとった虚構の方法というものを考えてみようと思うのです。

一

そこで源氏物語の虚構の方法ですが、私は作者紫式部が分身の方法をとって書いていったと考えをつけております。いったい小説とか物語とかは、作者の人生観なり人間観を作中人物のものとして表現します。つまり作者は直接ではなく間接に作中の人物たちを通してするのです。そこにどういう人物

を選び出すかはまったく作者の自由ですが、作者はとにかく作中の人物に自分の分身を与えます。自分の分身とってわるければ、人間そのものの分身とってよいのです。作者は作中の人物たちに人間そのものの分身を割り当てるのです。小説とか物語とかはこの分身の方法によりまして、文学特有の抽象性が生まれると共に、文学特有の現^{リアリティー}実性が生まれます。

それは必ずしも分身イコール作者というようにはなりません。考えてみますと、この分身の方法は人間存在に対する一種の遮断の方法、さえぎりとめる方法でありまして、そこには分身以外の人間はみな排除され、押しのけられてしまいます。したがって、複雑な嫌な世の中がいちじるしく単純化され理想化されまして、そういう意味で極度に抽象化されます。実際の世の中は作者が考えるよりもずっと錯雑しており、作者の思いも及ばない人間が一杯いますし、そしてそれらの人間がこの世の中でそれぞれ何らかの役目を果たしているのですが、作者は抽象化を施し作者の分身的な近親者だけを取り上げるわけです。ですから、それがとても単純化され理想化されますので、焦点もはっきりして読者のほうも自分の頭をむだに働かさずにすむ、それで気分も爽快になります。

とにかく、実際は世の中はそんな人間だけですこしも動いていないのに、小説とか物語とかになると、このように作者は自分の分身的な近親者だけを取り上げ、あたかも世の中がそういう人物だけで操られているようなふうに構成するのです。そういうふうに構成しますから、代わりにそこへ出て来る人物たちの身元はぎりぎりに洗われますし、その動作や心理も残るところなく写されます。したがって、作中の人物はそれが分身であるだけに、一層深くかつ強く作中の現実を生きていくわけです。このような小説、物語の考え方は、私がエドモンド・フッセルの現象学の流れを汲む哲学者から学んだものであります。

では源氏物語において作者紫式部は分身として、どのような人をそしてどのようなことを取り上げてどう書いていったか。それは源氏や紫上のようになさけのある人をなさけのあることをよしとしまして、なさけのトーン（作調）、なさけという人の飽かぬ美しさをトーンとして書いていったと私は考えるのです。源氏物語を読んでいますと、多くの「あはれ」ということばと共に、百十七例の「なさけ」ということばに出会いますが、私は源氏物語でこのことばに心が惹かれます。これは和歌では少ないことばでして、平安朝の散文では伊勢物語あたりから見えるようになります。私考えますのに、紫式部は実は源氏物語全体にわたって、どの巻もどの巻もつねに作中人物のそれぞれの身になって書いていると思いますし、その源氏物語の作中人物のひとりびとりにとっても、何よりも大切なことは自分のことだけでなく、相手の身になって考える思いやりでありました。なさけは相手に対する思いやりで、相手を思いやりをもって暖く遇するのですが、平安朝の生活ではこのなさけある態度をとることが人々の最も望ましいこととされており、反対になさけなしと見られることを人々はとても嫌っております。そう考えます。

そこで次に私は紫式部が分身として、どのようになさけある人たちを書いているかを見ようと思います。たとえば源氏物語を須磨の巻まで読んでいきますと、須磨に退いた源氏から藤壺のもとに手紙がとどき、藤壺が源氏の失脚を嘆く一方思慕するところがあります。そこに「年ごろはただものの聞えなどのつましさに、すこしなさけあるけしき見せば、それにつけて人のとがめいづることもこそとのみ、ひとへにおぼし忍びつつ、あはれをも多うごらんじ過ぐし、すくすくしうもてなし給ひしを」とありますが、これは藤壺が幾年このかた源氏に思いやりがなく知らぬ顔で通し、取りつくしまもない態度をとったのは、すこしでも自分が彼にやさしいそぶりを見せたなら、誰かがとかくいい出すこともあろうと我慢してのことであったという。さらに、自分は源氏を嫌ったのではない、彼の気持に添うようにしたかったのであるが、無理に抑えてきたのだという。しかしながら、源氏とのあやしい仲をこ

ういうふうを書くのは、どういうことになるでしょうか。実際藤壺は源氏が恋慕の情を訴えてきた時にはこぼみきれずに子までなしてしまっし、こうして折節の眺めに須磨から歌をおくってきたのに対しては、彼の身になって返歌をするというような、なさけある態度をとった、そうした洗練された高い教養があったということなのです。彼女はなさけのない態度をとることは、恋愛の情趣を害なう、洗練されない、無教養な振舞いとしたのです。

これはたしかに平安朝の人々の一つの理想でありまして、藤壺の面影がどうしても忘れられぬ源氏は、藤壺の姪で彼女によく似た美しい少女を北山の庵室で見つけて、のち自分の邸に迎え取ってわが子のように養育します。しかし、その愛がいつしか異性への愛へとかわっていったことはご存知のとおりですが、葵の巻で源氏がこの美少女を真になさけを弁えたひとに育てあげたいと思う。そういうところがあって、この紫上と呼ばれたひとこそ生涯源氏の理想の女性であったのですから、なさけを重要視していることが知れ、なさけがそれこそ理想であったことがよくわかります。

すこし前にもどって、花宴の巻をみますと、源氏が南殿の花の宴のあと桜月夜にさまよって、弘徽殿の細殿に忍び込み女と契るところがあります。源氏は実をいうと藤壺に逢えないかとの淡い希望からその辺をさまようのですが、戸口がしまっているので溜息が出ます。とたまたま弘徽殿のほうで中から美しい声で歌いながら出てくる女がいます。これが朧月夜であり、彼女とのことで源氏は須磨へ退かなければならなくなってくるのです。さてこの女はつかまったのが源氏とわかってほっとするが、どうしたらよいのか。女はつらい思いでいるものの、無愛想なごつごつした態度は見せまいと思って、源氏に靡くのです。「わびしと思へるものから、なさけなくこはごはしうは見えじと思へり」とあるのは、女が源氏に靡いたさまをいったのですが、これはいくらなんでも浮薄に感じられます。

次に葵の巻を見ますと、賀茂祭の御禊ごけいの日に行列ぎょに供奉する源氏の姿を見ようと、葵上と六条御息所とが車の場所を求めて激しい争いを起こします。

その結果葵上方のために御息所の車がうしろのほうに押しやられてしまったことを源氏が耳にして、葵上を批判し御息所に同情するところがあります。いまその源氏の批判を分析してみますと、葵上は相手の身になって思いやらないばかりか、同じ男の愛を受けている女同士は互いに思いやるべきなのにそれもしないで、相手の御息所の心を傷つけてしまったというのです。このなさけなき人のなさけなきことは、つまり葵上の御息所との車争いのことはよほど源氏には骨身にこたえたようで、藤裏葉の巻に見られるように、後年源氏は賀茂祭に一緒した紫上に葵上が権勢をたのんでおごり高ぶって、あのような事件を起こしたのは心ない仕打ちでしたと語っています。

またあとのほうへいって、御法の巻を見ますと、紫上が自分の死が近づいたのを感じ、人々に名残りを惜しむところがあります。紫上はなんとなく張り合う心が交じりもするであろうが、それでも互いにやさしくお付き合いしていた明石君なども、みな永久に生きられる世ではないが、自分がまっさきにひとり行く方も知らずこの世を去っていくことを思いつづけるととても悲しいという。このように見てきて思い起こされるのは、これも藤裏葉の巻ですが、紫上が明石姫君の入内に際してはじめて明石君に直面し、共にそのすぐれた人柄を認めあい打ちとけることが語られていることです。なさけは源氏物語でなさけを見せるとか、なさけをかはすとかの形でよく使われますが、肉親の間の真情を示すには一度も用いられていないことも注意してよいことです。

三

私がここで述べようとしたことは、作者紫式部が源氏物語における虚構の方法として分身の方法をとり、紫式部はこの分身の方法をもってなさけある人々をよしとし、なさけなき人々を斥けて、なさけのトーンで書いていったということです。そして源氏物語の主題である愛の種々相をなさけのトーンで書くなどということは、やはり分身の方法をとらなければ書けないという

ことでした。これがおそらく間違いでないことは、清少納言の枕草子を見るとよくわかります。

枕草子に「よろづのことよりも、なさけあるこそ」という随想章段がありまして、そこで清少納言がはっきりと、「よろづのことよりも、なさけあるこそ、男はさらなり、女もめでたくおぼゆれ」といっております。たしかに当時は清少納言がいうように、思いやりが男にとっても女にとってもそれこそ大切であり、男も女もなさけある態度をとるのが理想であつたでしょうが、みながみなそのように判断し行動したかどうか興味があることです。源氏物語では朧月夜は桜の宴の一夜源氏と契ってしまい、あわただしく扇だけを交して別れますけれども、果たして清少納言などそうした男のことにばに耳を傾けたのでしょうか。いやそうではありませんでした。枕草子の「故^{ことの}殿の御ために、月ごとの十日」という日記的章段にこういう話がしるされています。これは日記的章段ですから分身の方法でなくて、作者そのままの方法であります。それは長徳元年九月十日のことですが、職の御曹司で中宮定子の父関白藤原道隆の追善供養が行なわれた時のことでした。そのあと蔵人頭で美男子しかも才学にたけた藤原^{ただのぶ}齊信が清少納言に、どうして私とほんとうに打ちとけてくださらないのかといい寄ってきます。清少納言より年下のとてもすてきな貴公子は自分がこの殿上を去ったら、何を君との思い出にしようとロマンチックなことをいうのですが、だからすべてを許せとは何ということでしょう。清少納言は拒否すると無教養なうちと軽蔑されるかもしれないが、そうかといって許すわけにはいかない。彼女はいい寄られても煙にまいて逃げてしまいます。いくら平安朝がなさけを理想とする時代であるといっても、女はそれによって自分の人生がよくなるもなるのですから、やはりこのように相手の気持を踏みにじったり相手の行動に逆らったりすることがあるわけです。したがって、清少納言は枕草子でその人の身になって書く、その人の立場になって書くようなことはしておりません。

いずれにしてもなさけのトーンといった、人の心の飽かぬ美しさなどここ

に述べた分身の方法をとらなければ書けないと思います。このように考えてきますと、私はやはりキーン氏が朝日の8月3日の夕刊の紫式部日記で、自分が知る世界のすべての宮廷生活の中で、ただ一つ魅力を感じるのは源氏物語に描かれた宮廷であると述べられた理由もうなずけるのであります。それは源氏物語が思いやりを書いた思いやりの文学であるからであります。ただ私がここに述べたこの論は、東京大学の秋山虔氏が紫式部日記を詳しく読んでいかれそこから源氏物語の本質を紫式部の内面的な関わりにおいていきいきと捉えられた、そうした論と異なったものになってしまいました。

御清聴どうもありがとうございました。

討議要旨

A. Armour 氏から、分身の方法というのは「文は人なり」という考え方とは異なるものか定義をうかがいたいと質問があり、発表者から「文は人なり」という意味のものではなく分身と作者とは連続していない。しかし分身の方法を用いることにより、文学の抽象性に特有の現実性が生まれるので大作家は、みなそのような方法をとるのではないかと思うと回答があった。これに対しさらに Armour 氏から、『源氏物語』のすぐれている点は、作中人物が必しも理想化された行動をしないところではないか、分身としてあまり理想化されていると20世紀のわれわれには現実性があると思えなくなると思う。——と意見があり、発表者から秋山虔氏も『源氏物語』は絶望の文学と書かれており、今の御意見もそれに近いと思うが、私はもっとあまい理解もできるのではないかとこの発表を行ったとの回答があった。

また秋山虔氏から、分身の方法は右大臣のような男性も分身と考えられるのか。最近いわれている分身の方法とも違う特殊な方法のように思うが、それはどのような伝統・遺産を受けついだものなのか。ここでいう「なさけ」と宣長の「もののあわれを知る」ということはどのような関連があるのか。

またそれと関連して配布資料にある日野龍夫氏の、

不義の子の薫を抱いた源氏の、因果の理法をわが身の上に悟ったおのきは……この作品の実に重いテーマであるはずであるが、宣長はこのことに何の関心も向けていない。宣長が関心を向けているのは、作品の中の数多く描かれた恋の、それぞれに哀切な情趣ばかりであって、人間の深遠な苦悩ではない。宣長の『源氏物語』理解はかなり平板なものであったと評せざるを得ない。

が引用されているが、この点は「なさけ」論ではどのようになるのか。という質問があった。

これに対し発表者から、

分身は男性に対しても適用できるもので、この考えはエドムンド・フッセルの現象学の流れを汲んだもので、亡くなられた務台理作氏から学んだものである。

また柏木の巻の薫を抱くところも、あるいは女三の宮に対しても、現実には憎しみも怒りもあったであろうが、それが「なさけ」のトーンで書かれていると思うわけです。私の理解は、甘いといわれる宣長よりもっと甘いわけです。秋山先生の理解のように激情的で厳しいところも『源氏物語』の魅力ですが、また甘いところがあるから現在まで読み継がれて来たのではないかと思う。と回答があった。

このあとさらに藤井貞和氏から

「なさけ」という言葉は上代には出て来なくて、平安時代になってよく使われるようになったと思うが、それは平安時代の特色か、と質問があり、これに対し発表者から、「なさけ」は『伊勢物語』あたりから使われており、近世の「情」という漢字で表されるもののようにきついものでなく、「思いやり」といったもので、肉親には使われていないし、女同志でも「なさけ」をかけあう、その意味で資料にも仮名で「なさけ」と記した、時代による意味のちがいの語史をおさえておくことも大切なことである、と回答があった。